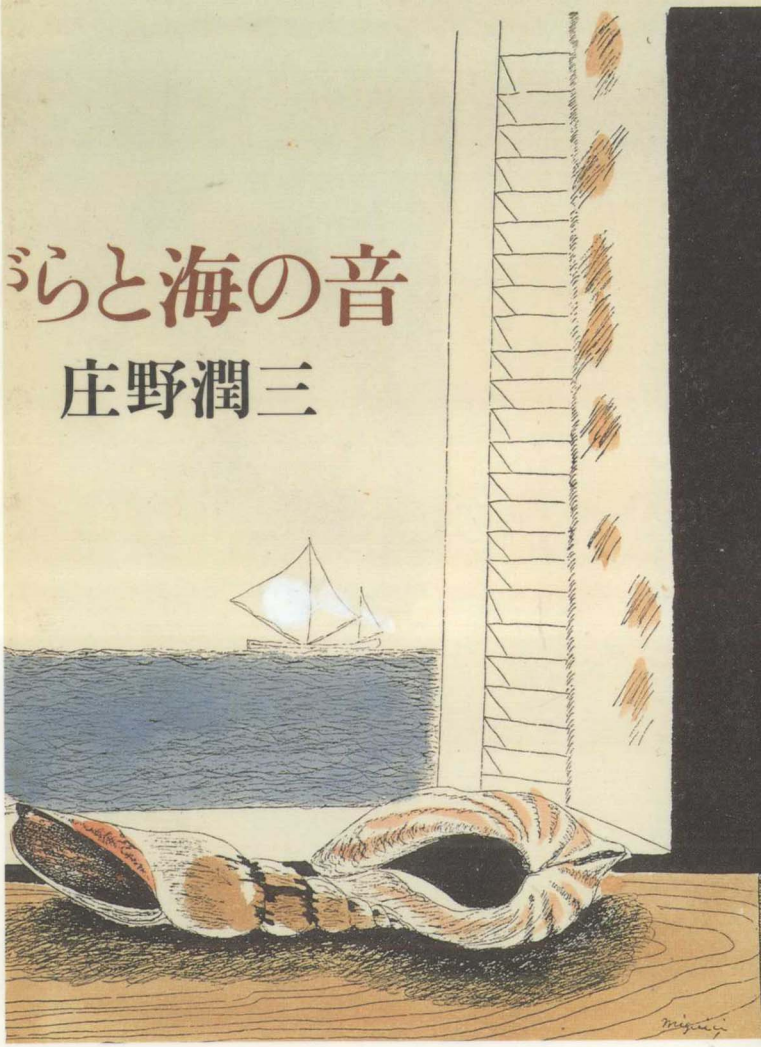
貝がらと海の音

庄野潤三



新潮社

貝がらと海の音

著　者　庄野潤三　© Junzo Shono 1996, Printed in Japan

発　行　一九九六年四月二〇日

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社新潮社

162　東京都新宿区矢来町七一

電話　〔編集部〕(03)三二六六—五四一一
〔読者係〕(03)三二六六—五一一一

振替　〇〇一四〇—五—八〇八

印刷所　株式会社光邦

製本所　大口製本印刷株式会社

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-310609-3　C0093

価格はカバーに表示してあります。

貝がらと海の音

庄野潤三

新潮社

装画　三岸好太郎
装幀　新潮社装幀室

一

成城へ行く用があって、昼食後、妻と二人で家を出る。八月が終って、九月に入った最初の日のこと。暑い日。崖の坂道を下りて行くと、崖寄りの、雨水が流れるようになったコンクリートの溝の縁の狭いところを、小さなとかげがわれわれと競走するように走った。

大へんな速度で走る。私も妻もとかげの走る速さに驚きながら歩く。と、不意に向きを変えて、もと来た方へ走り出した。今までとは逆の方向へ、これまでと全く変らない速さで走り出した。

こちらについて走って行ったのではよくないと咄嗟に判断したのだろうか。とにかく、一瞬に向きを変えることに決めて、真うしろを向いて走り出した。

「驚いたな」

と私はいった。

「よくあんなことが出来るもんだな」

「そうですね」

向きを変えるのは分る。このまま走って行けば何かしらとかげにとって不都合なことが起ると考えたのだろうか。それにしても、あれだけの速さで走っていて、咄嗟に向きを変えて、もと来

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

た方へ走り出す。それも目にもとまらぬ早業で今まで走っていたのと同じ速さで走り出したのだから、大したものだ。
「天才だなあ、今のとかげ」
「天才ですね」
しばらく坂道を下りて行ってから、
「あんな小さいとかげで、よくあれだけ速く走るなあ。あんな小さいとかげ、はじめて見た」
というと、
「崖の芒の生えているところにいて、ときどき出て来るんでしょうね」
と妻がいう。
私の家の道路に面した石垣の下に並べたプランターがある。そこへ妻はブローディアを植えている。このプランターの下にとかげがいて、ブローディアの咲いている六月、妻が朝、草花に水をやるとき、プランターの下からとかげが飛び出す。水がかかって驚くのかも知れない。
前に次男のところの小学二年になるフーちゃんと幼稚園へ行っている春夫が来たとき、とかげを欲しがったので、妻がプランターを一つ動かした。とかげが一匹、飛び出した。だが、フーちゃんも春夫もいざとなると怖くて、つかめなかった。フーちゃんというのは、名前が文子で、まだ私たちの家から坂を下りて行った先の大家さんの借家にいて、よくお母さんのミサヲちゃんに連れられて「山の上」（と私たちのことを呼んでいた）へ遊びに来ていた二歳のころから、私たちはこの子のことをフーちゃんと呼んでいた。
とかげをフーちゃんたちに持たせてやることは失敗に終ったが、そのあと、妻が庭の山椒の葉にとまっているあげはの小さい幼虫を一匹、山椒の葉ごとお菓子の箱に入れて、二人で次男のと

ころへ持って行ってやった。
（次男の一家は、一昨年の秋、「山の下」の大家さんの借家から電車で一駅先の読売ランド前の坂の上の家へ引越した。広島の方へ移るので売りに出していた夫婦者の家を、貯金を頭金にして買ったのである）
フーちゃんは大よろこびで、私たちが次男の家にいる間中、あげはの幼虫のいる箱を放さなかった。図鑑を持って来て、あげはのところを読んだり、そこに出ている図と山椒の葉にとまっている幼虫を見くらべたり、虫眼鏡を持って来て、青虫を覗き込む。名前をつけることになった。
ミサヲちゃんが、
「あげは、だから、アゲちゃんは？」
といったら、あっさりと決まった。
帰りがけ、妻がフーちゃんに、「アゲちゃんが蝶になったら、電話で知らせてね」といった。ミサヲちゃんには、「山椒の葉をいっぱい入れておいたけど、食べ尽したら、どこか山椒のあるお家で貰って来てね」と頼んでおいた。
家へ帰る道で、私たちは、フーちゃんがあんなによろこぶとは思わなかったなと話した。
それから一月ほどたって、七月半ばの或る朝のこと、電話がかかって来た。妻が出ると、
「庄野です」
とフーちゃんの声である。無口であまり物をいわないこの子は、電話のとき一層頼りない、心細い声を出す。
「アゲちゃんがちょうになっちゃった」
という。よかったねと妻はいった。

フーちゃんは、何かよくないことが起ったような声でいった。
箱から出してもらったアゲちゃんはフーちゃんたちが見守る中を、庭へ飛び出して行ったのだろうか。フーちゃんは蝶になったと報告した（妻との約束通り）きりで、詳しいことは何もいわなかった。今まで家の中にいたアゲちゃんがいなくなって、さびしかったのかも知れない。全速力で走る崖の坂道の小さいとかげを見たら、フーちゃんと春夫に上げたあげはの幼虫のことを久しぶりに思い出した。

午前中に妻は「山の下」へ大阪の義姉（去年の秋に亡くなった二番目の兄の奥さん）から届いた木曾の開田村の玉蜀黍を届ける。「山の下」は、私たちの家の前の坂を下りて行った先の大家さんの借家に住む長男一家のこと。私たちのいる丘ともう一つ南の丘との間の谷間に当るところにいる。夏は暑い。
玉蜀黍は、兄が長年、万作小屋という名前の山小屋で夏の休暇を過し、村の人たちと親しくつき合っていた木曾の開田村に兄の句碑が建ったので、除幕式に村役場から招かれて出席した義姉と兄の長女の晴子ちゃんの木曾のお土産である。おいしい玉蜀黍であった。
「山の下」から帰った妻は、長男の長女で今年三歳になる恵子ちゃんがかいた「じいたんのかお」の絵をくれた。鉛筆でかいたもの。まるい、大きな顔に目と鼻と口が入っていて、頭の上にまばらな髪の毛が立っている。「じいたん」の心細い頭髪の様子をよくつかんでかいてある。
「よく見ているなあ。恵子ちゃん」
「そうですね。顔のまるいところ、感じが出ていますね」
電話をかけてお礼をいって上げてと妻がいう。電話口に出て、

「恵子ちゃんですか？　じいたんだよ」
恵子ですとしゃがれ声の返事が聞える。
「じいたんのかお、かいてくれてありがとう」
それから、バイバーイというと、向うから元気のいい「バイバーイ」が聞えた。それで終り。
「山の下」で、妻は玉蜀黍のほかになすのやで買った蜂蜜をあつ子ちゃんに分けて上げる。恵子ちゃんは、蜂蜜をもらったと聞いて、指につけてなめたいといい出す。八月に、向ヶ丘遊園の本屋で三人の孫に上げる本を妻と一緒に買った。南足柄の山の中腹の雑木林に住む長女が小学四年の末っ子の正雄を連れて来るというので、そのときに三人に上げるつもりで買った。正雄に『三銃士』、フーちゃんに『ギリシャ神話』、恵子ちゃんには絵本の『クマのプーさん』。
『クマのプーさん』をもらった恵子ちゃんは、お父さんに読んでもらったのだろう。「山の下」では、恵子ちゃんの面倒は専らお父さんがみている。今は、今年三月に生れた龍太にあつ子ちゃんの手がかかるから、なおさらそうなるだろう。
蜂蜜はプーさんの大好物で、壺のなかの蜂蜜を指につけてなめる。恵子ちゃんはプーさんの真似がしたくて、
「なめたーい」
という。
プーさんのする通り、指につけてなめたいというのだが、あつ子ちゃんは、「いけません。スプーンでとりなさい」という。妻はあつ子ちゃんに、「いいよ、いいよ。指につけてなめさせて上げなさい」といって帰って来た。あとはどうなったか、知らない。

この前、八月の末に南足柄の長女から宅急便が届いた。近所の松崎さんからもらった、何にでもよく効くというクリーム（これは、長女が庭先で蜂に眉の上を刺されたときにすぐつけたら、痛みがとれ腫れもしなかったというから、「何にでもよく効く」かどうかはともかくとして毒虫に刺された場合につけると効くことは証明されたわけだろう）、栗、フランスの紅茶、角砂糖、前にも送ってくれた大雄山線塚原駅前の菓子屋で売っているチョコレートケーキ（大へんおいしい）などが入っていた。

長女の手紙が入っている。

ハイケイ足柄山からこんにちは。先日は久しぶりの「山の上」の古巣で、おいしいお昼御飯を頂いたり、可愛い姪や甥の大集合のなかでティータイムをにぎやかにすごしたり、本当にどうも有難うございます。正雄も新学期が秒読みになったときに、最後の楽しい一日を遊ばせてもらって、大よろこびで帰って来ました。翌日から夏休みの自由課題の「からすの研究」に取り組み、木の枝や犬の毛や（註・長女のところでは犬を二匹飼っている。二匹とも棄て犬を拾って育てた。トムとジェリー）わらで見事な大きなからすの巣を作りました。思わず卵を産みたくなるものです。

松崎さんが何にでも効くクリームを持って来てくれたので送ります。あっちこっちに少しずつでも塗ると、とても身体にいいそうなので、清水さんにも教えて上げてね。（註・清水さんは、近くの西三田団地にいる妻の友人で、地主さんに借りている畑で丹精した薔薇をよく届けて下さる方である。前に南足柄の長女のところへ庭のエビネ蘭を見にご一緒に出かけたこともある）清水さんから伊予のピオーネが二箱も届いたの。大きいのに種のない、おいしい葡萄で

す。松崎さんたちにもお裾分けして、皆で嬉しく食べています。
あまりの日照り続きで、畑を持っている菊池さんのおじいちゃんや加藤さんのおばあちゃんが大弱りなので（註・菊池さんも加藤さんも土地の人。長女は親しくつき合っていて、よく菊池さんから畑の野菜を頂いたりしている）松崎さんたちと相談して、各自が滅多にしない良いこと（例えば松崎さんは大掃除、久布白（くぶしろ）さんは洗車とか）をしようと話していたら、なんと急に空が暗くなり、雷とともに土砂ぶりの雨になりました。こんなに利き目があるとは。みなで怖れ、おののいたの。
では、おいしいものを沢山食べて、「何にでも効くクリーム」で病気を弾きとばして、元気におすごし下さい。

この宅急便の手紙から一週間ほどたって、長女から電話がかかって来た。丁度、妻がお使いに出た留守であった。
「なつ子です」
といってから、声を張り上げて、
「梨が着きましたァ」
駅前の、生田へ引越して来て以来の馴染のもぎとり梨の梨屋さんから送った多摩川梨の箱が着いたという知らせであった。
そこで、清水さんのピオーネみたいに足柄中にまき散らすんじゃないよとひとこと釘を刺しておいたら長女は、
「もうまき散らしています」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

長女の親しくしている家が山の住宅に何軒もある。清水さんのピオーネが二箱着いたときは、その友達に分けたらしい。今度の多摩川梨もたちまち方々へ持って行くのではないかと思ったら、もう「まき散らして」いるという。話題を変えた。

「正雄がからすの巣を作ったんだって？」

「いいのが出来たの。学校へ持って行ったら、友達にはあんまり受けなかったみたい。なんだ、これ、というだけなんだって。先生もあまり反応がなかったらしい」

「そうか。こっちは大きなからすの巣を作るとは、ユニークだなといって二人とも感心しているんだよ」

「そうね。そのユニークなところが、学校ではあまり分ってもらえなかったらしいの」

「まあ、いいや。本物そっくりのからすの巣を作るなんて、すばらしいよ。おじいちゃんも感心しているって正雄にいってくれ」

長女は、正雄がいろいろな本を見て、参考にして作ったのといった。

ついでにつけ加えると、正雄はこの前、来たとき、私と妻への贈り物の絵物語の「にんにくの名探偵」を持って来てくれた。あれはいつごろから始まったのだろう？　にんにくを主人公にした絵物語をかいては、私たちのところへ来るときに渡してくれるようになった。にんにくがいろいろ冒険をする話である。危い目に会うのだが、切り抜けて、最後はいつも「めでたしめでたし」で終るところがいい。そうして主人公のにんにくというのは、つまり正雄のことなのである。

例えば、「にんにくのきょうりゅうじだい」というのは、きょうりゅうに会ってみたいなと考えたにんにくが、何かの装置を作り出して、大昔のきょうりゅうがいた時代へと行く話で、これはつまり、正雄の夢なのだろう。

午前中の仕事を終って、二回目の散歩に出る。朝食後のポストまではがきを出しに行く分を入れて、一日に四回歩くのが私の日課になっている。夏の間は、汗をかいて散歩から帰って来ると、妻が冷たい井戸水でしぼったタオルを持って来る。それで顔を拭く。「もう一回」と妻はいって、おしぼりのお代りを持って来る。

冷たいおしぼりのあと、小さい温室みかんと冷たい麦茶を持って来る。清水さんから頂いた伊予の種なし葡萄のピオーネがある間は、ピオーネと冷たい麦茶。このピオーネがおいしくて、一粒一粒惜しむようにして食べた。

妻はピオーネを皮をむかないでいきなり口に入れる。こちらは、皮をむいてから食べる。妻にいわせると、皮のまま口に入れると、うすい皮と果肉の間にある甘いおつゆがおいしいという。なるほどそういえば、皮をむく間に汁が垂れて落ちる。汁を少しもこぼさずに皮をむくことは出来ない。だから、甘いおつゆを逃さず口に入れるには、妻のように皮をむかないでいきなり口に入れるのがいいのかも知れない。こちらは、そうすると、口に残った皮を取り出さないといけないから、それが煩わしい。はじめに皮をむく方がましだという考え方である。

だが、おいしいピオーネの食べかたについては、夫婦でお互いの好みに任せて、干渉はしないことにしている。

「これでピオーネはおしまいです」

と妻にいわれた日は、名残が惜しかった。もうこれで来年の夏に清水さんからピオーネを頂くまでは（もし来年も頂けるものとして）、このおいしいピオーネとお別れかと思うと、ちょっとさびしい。

ピオーネが終ってからは、妻が市場の八百清で買って来る小さい温室みかんをひとつ、食べる。これもおいしい。二つ食べるときもある。みかんを食べて冷たい麦茶を飲むと、テーブルの上にある本を取って読む。

本を読んでいるうちに、歩いて来た疲れが出るのか、眠くなって来る。ソファーの背中にクッションをおいて、それに凭れて目をつぶる。

うとうとしていると、台所の妻が、

「ご飯、出来ました」

と呼ぶ。そこで、「はい」と返事するのだが、居眠りしているものだから、その返事は、

「ふあい」

というふうな声になる。「はい」といったつもりの声が、そうなる。

昼食の用意の出来た六畳へ出て行って、妻に、

「いまの返事は、へんだったか?」

と訊くと、妻は「へんだった」という。

これが居眠りしていないときは、はっきりと、「はい」と聞える声で返事が出る。妻はせっかく気持よく眠っているところを起して済みませんというけれども、これは仕方がない。大事な昼ご飯だから、居眠りを続けているわけにはゆかない。

午前中の机の前での仕事を済ませ、一日四回の散歩のうちではいちばん時間の長い二回目が終って（ただし、真夏の間は妻のすすめで短縮コースを歩くことにしている）、ほっとしたときに迎える六畳の間での昼食を、私は楽しみにしている。

書斎のテーブルの上に、孫のかいた絵が二枚、ある。ときどき、ひろげて見る。

一枚は、前にいった、「山の下」の長男のところの三歳になる恵子ちゃんのかいた、鉛筆がきの「じいたんのかお」。

もう一枚は、南足柄の長女のところの、小学四年生になる末っ子の正雄がクレヨンでかいた「ジンベエザメ」。これは、八月の終りに長女に連れて来てもらった日に、みんなでお昼御飯を食べたあと、机の上でかいた。水族館で大きなジンベエざめが泳いでいるところを、水槽の前で人間がおどろいて見ている。一人は大人で、女の人らしいから、正雄のおかあさんのつもりかも知れない。離れたところにいるのは、男の子らしいから、自分のつもりだろう。

ジンベエざめのほかにふくらんだとんぼ取りの網のように見えるものをかいてある。これは「えい」のつもりだろう。うまく、「えい」の、ゆらゆらと浮んでいる感じをつかんでいる。

正雄は夏休みにお父さんとお母さんといちばん上の、今年の春、大学を出て横浜の会社に就職したお兄さんの和雄と四人で、神戸、大阪へ旅行した。この関西旅行の目的は何であったかというと、大阪天保山にある水族館の海遊館で私たちから聞いた体重二千キロというジンベエざめを見物するためであった。

それには、私たちが四月に友人の阪田寛夫を誘って大阪天保山へジンベエざめを見に行ったことから話さなくてはいけない。大阪天保山の水族館にジンベエざめがいることがどうして分ったかというと、今年三月に私の『さくらんぼジャム』（文藝春秋）という本が出て、その本を受取った阿川弘之からのお礼の手紙のなかに、先日、大阪天保山の海遊館という水族館へ行って、体重二千キロのジンベエざめを見て感動しましたと書かれていたからであった。阿川が手紙のなかに書いてくれなかったら、私はこの世の中にそんなものがどこかで泳いでいるとは知らないまま

でいるところであった。阿川に感謝しなくてはいけない。

ところで、私たちはこの数年、毎年四月になると、父母のお墓参りをかねて、宝塚大劇場へ宝塚の公演を見に行くことにしている。四月の公演には、その年に宝塚音楽学校を卒業して月、花、雪、星の四つの組に配属された初舞台生が全員揃って口上をいう。黒の紋付に緑の袴の生徒が、いよいよこれから舞台に立ちますのでどうぞよろしくという口上を述べる。はじめてこれを見たとき、驚いた。胸がいっぱいになった。で、それ以来、四月には何とか都合をつけて宝塚まで出かけるようになった。宝塚歌劇を見物するのは、私と妻にとって晩年の大きな楽しみであるが、その中でも四月の宝塚大劇場での初舞台生の口上は欠かせないものになったといってもいい。

東京で宝塚を見るときはいつも一緒に行く阪田寛夫を誘って、今年も行くつもりにしていた。そこへとび込んだのがジンベエざめである。阪田と妻と三人で相談して、今度の大阪行きに天保山のジンベエざめ見物を加えることは出来ないものか話し合った。大阪阿倍野のお墓参りがある。次に去年の秋に亡くなった二番目の兄のためにお線香を立てに帝塚山の兄の家へ行くことにしている。どうすればいいか。大阪ではいつも中之島のホテルに泊る。二晩泊ることにしている。で、着いた日にお墓参りをして、その足で帝塚山の兄の家へ行くことにすればいい。二日目の午前中に天保山へ行き、ジンベエざめを見物して、すぐに宝塚へ行けば、午後三時からの安寿ミラさんの花組の公演に間に合う筈だ。何でもないことだと分って、阪田と妻と私の三人はよろこんだ。

このようにして私たちは首尾よく四月に大阪天保山で大きな水槽のなかを、鼻の先に鰯らしい六尾の魚を泳がせて（どうしてジンベエざめの鼻の先を六尾の鰯が道案内でもするように泳いでいるのか、分らない）、腹の下に三びきのこばんいただきをくっつけたまま、悠々と泳ぐ体重二千キロのジンベエざめと対面することが出来た。ゆらゆらと泳ぐ「えい」もいた。そうして、三

人ともそれぞれ満足したのであった。この日、私たち三人はジンベエざめも見たし、安寿ミラさんの花組の公演「ブラック・ジャック」も見ることが出来た。いうまでもなく、阿倍野のお墓参り（阪田家の墓もある）も、兄のためにお線香を立てることも出来た。ついでにしるすと、「お差支えなければ私もご一緒させて下さい」と申し出た阪田は、兄のためにグランドホテルの花屋で買った立派な花束を、写真代りの兄の小さな油絵の自画像の前にお供えしてくれた。

帰ってから、南足柄の長女が「山の上」へ来たときに、この阪田寛夫と三人のジンベエざめ旅行の話をした。「正雄なんかに見せてやったらよろこぶよ」と妻がいった。

ところが、長女の主人はその話を聞いて、夏の休暇にみんなでそのジンベエざめを見に行こうや、ということになったらしい。

書斎のテーブルの上にあるのは、正雄の「ジンベエザメ」と、恵子ちゃんの「じいたんのかお」の二つだけだが、正雄たちが来た日にミサヲちゃんと一緒に来たフーちゃんが、図書室の机の上で画用紙にかいたクレヨンの絵もある。ただし、これは夜空の下に（よく分らないが、気分としては夜空らしい）狸か猫か、そんなふうに見える生きものが立っているところをかいたもので、何だかはかない絵である。

もともと無口で、あまり物をいわないフーちゃんが、近頃ますます無口な子になったのを私は気にしている。次男に訊いてみると、学校ではいうべきときにはちゃんと自分の考えをいっているらしい、授業参観のときなんかも、先生の質問に対して、手を上げて、答えているとミサヲはいっている。友達は何人もいるらしく、よくお誕生日の会に呼ばれて行くし、自分の誕生日には、何人も友達を呼んで来る、という。ところが、家にいるときは、あまり話をしないというのである。次男は、自分もミサヲもあまり口数の多い方でないから、という。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com